

日本音楽財団・全国公立文化施設協会共同事業 ストラディヴァリウス・コンサート

吉本 梨乃 Rino Yoshimoto Violin

神戸市生まれ。
3歳でヴァイオリンを始め、国内の数々のコンクールで優勝や入賞をしてきた。14歳で渡欧、ウィーン国立音楽大学のギフトッドコース、予備科でミヒャエル・フリッシェンシュラガーに師事、現在はブリュッセルのエリザベート王妃音楽院でオーギュスタン・デュメイに師事すると共にブリュッセル王立音楽院に在学中。

2022年第3回上海アイザック・スターン国際ヴァイオリン・コンクール（中国）に入賞、2022年第10回フリッツ・クライスラー国際コンクール（オーストリア）で第2位、2024年イサンユン・コンクール（韓国）に入賞。

2019年には若手音楽家を支援するアメリカAADGTの25周年記念コンサートに招待されカーネギーホールで演奏したほか、国内外の数々のオーケストラと共演している。2021年ウィーン室内管弦楽団と、2022年にはウィーン室内合奏団のソリストとしてスペインツアーを行ったほか、ウィーン楽友協会ウィーン放送交響楽団と共演、さらにブルガリア国立放送交響楽団、ベルギー国立管弦楽団、ブリュッセル・フィルハーモニック、上海交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団と共演を重ねている。

2020、2021年度ロームミュージックファンデーション奨学生。
日本音楽財団から貸与されているストラディヴァリウス1736年製ヴァイオリン「ムンツ」を使用。



©Keiji Fujita

ムンツと出会って・・・

この楽器に出会って以来、その響きの豊かさと繊細さ、美しさに日々魅了されています。深みのある低音から透明感あふれる高音まで、音のひとつひとつが魅力的で、私の思い描く音楽をまるで導くように奏でさせてくれます。特に弱音での響きの柔らかさ、どんなに小さく弾いても遠くまで飛ぶプロジェクション、そして力強い輝きのバランスが絶妙で、毎日のように新しい発見があります。リハーサルや本番を重ねるごとに新しい表情を見せてくれることも、この楽器と共に音楽をつくる喜びのひとつです。演奏家にとって、楽器は単なる道具ではなく人生を共に歩む大切なパートナーです。ストラディヴァリウス「ムンツ」はそのことを改めて実感させてくれる楽器であり、これからもさらに深く向き合い、響きの可能性を探求していきたいと思っています。

ヴァイオリニスト 吉本 梨乃

金子 三勇士 Miyuji Kaneko Piano

1989年、日本人の父とハンガリー人の母のもとに生まれる。6歳より単身ハンガリーに留学。11歳よりハンガリー国立リスト音楽院大学に入学、16歳で帰国した後、東京音楽大学付属高等学校に編入、清水和音、迫昭嘉、三浦捷子の各氏に師事。

2008年バルトーク国際ピアノコンクール優勝。
第12回ホテルオーケラ音楽賞、第22回出光音楽賞など、受賞多数。

これまでにゾルタン・コチシュ、シルヴァン・カンブルラン、ジョナサン・ノット、小林研一郎、広上淳一、山田和樹、鈴木優人、など、国内外の名だたる指揮者と共演。オーケストラではハンガリー国立フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、プラハ交響楽団、NHK交響楽団等と共演。これまで20カ国近く世界各地で演奏活動を行なう。

近年はライフワークの一環としてアウトリーチ活動も積極的に行っている。NHK-FM「リサイタル・パッシオ」に司会者としてレギュラー出演の他、テレビ、ラジオなど多数メディアに出演。2024年4月に発足した「日本＝ハンガリー未来プロジェクト」のエグゼクティブプロデューサーに就任、国家間の文化交流に精力的に取り組んでいる。キシマロシュ名誉市民。スタインウェイ・アーティスト。

オフィシャルHP <https://miyuji.jp/>

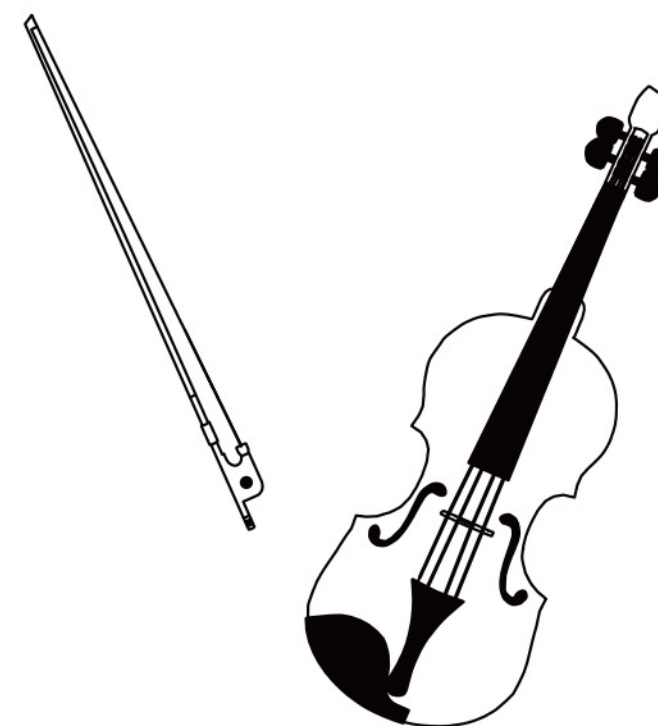


©Seiichi Saito

日本音楽財団・全国公立文化施設協会共同事業 ストラディヴァリウス・コンサート

吉本梨乃
ヴァイオリン・リサイタル

ピアノ：金子 三勇士



2025.
11.8 Sat.
開演 13:30 （開場 13:00）
ひまわりホール

主 催： 日本音楽財団 THE NIPPON MUSIC FOUNDATION 公益社団法人 全国公立文化施設協会 市川町 助 成：日本財団

{ Program }

バルトーク：ラブソディ第1番

ブラームス：ハンガリー舞曲第1番 ト短調

ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ第1番 ト長調 作品78

————— 休 憩 —————

J.S. バッハ：シャコンヌ

リスト：ラ・カンパネラ（ピアノ ソロ）

ラヴェル：ツィガース

バルトーク：ラブソディ第1番

バルトーク・ペーラ(1881～1945)はハンガリーを代表する作曲家で、音楽学者としても活躍した人物です。ハンガリーやその周辺地域を実際にフィールドワークして回り、それぞれの土地に伝わる民謡を、当時まだ発明されて間もない蓄音器で録音。それらの楽譜を出版したり研究論文を発表したりと、学者としての成果を上げつつ、収集してきた民謡旋律を用いた作品を書くなど、「民謡」はバルトークにとって重要な軸でした。

1928年に作曲された《ラブソディ第1番》は、バルトークのそうした姿勢がよく表れた作品です。トランシルヴァニア地方のルーマニア民謡を基調としつつ、ハンガリーの旋律なども含み、特徴的な付点のリズムや音階によって独特の情緒が表現されています。ハンガリー風ラブソディ(狂詩曲)の典型的な形式である「遅い楽章ー速い楽章」という2楽章構成で、とりわけ第2楽章にはヴァイオリンの技巧的なパッセージが多く散りばめられています。

ブラームス：ハンガリー舞曲第1番 ト短調

ハンブルク出身で後半生はウィーンで活躍したヨハネス・ブラームス(1833～1897)にとって、ハンガリーは「異国」ではあったものの、若い頃からその音楽を耳にする機会がありました。というのも、故郷ハンブルクにはハンガリーから亡命した人々が多かったからです。そのなかの一人に、ヴァイオリニストのエドゥアルト・レメーニがいました。1853年、若きブラームスは彼のピアノ伴奏者として演奏旅行に同行。そこでレメーニが弾くロマの旋律に魅了されました。このときに聴いた旋律の一部が、1869年に出版された《ハンガリー舞曲集》に反映されています。

これはブラームスが、ハンガリーの旋律を(作曲したのではなく)編曲した作品集です。第1番(ト短調)は、哀愁ただよう旋律に、伴奏のきらびやかな分散和音が応えるようにして始まります。もともとはピアノ連弾のために書かれたが、当時から大人気となり、作曲者自身による独奏版やオーケストラ版も出版されました。ヴァイオリンとピアノ用の編曲は、ブラームスの親友でヴァイオリニストのヨーゼフ・ヨアヒムによるものです。

ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ第1番 ト長調 作品78

ブラームスは1878年と1879年の夏、避暑地のベルチャハでこのソナタを作曲しました。作品全体を支配している抒情的で柔らかな雰囲気は、円熟期のブラームスの特徴です。とくに第1楽章の牧歌的な表情は、ほぼ同じ時期に作曲された《交響曲第2番》の第1楽章と共通するものがあります。変ホ長調に転じる第2楽章は、3部形式の緩徐楽章。中間部に葬送行進曲風の楽想が現れるのは、この頃、親しい友人クララ・シューマンの息子フェーリクスが若くして亡くなったことを悼んだものです。ロンド形式の第3楽章は、珍しく主調ではなく平行調のト短調。この主題の冒頭のリズムは、第1主題の冒頭と同じです。さらにこの楽章の途中には、第2楽章の主題が2度回想されます。このように、3つの楽章が独立しつつも関連し合っているのがこのソナタの特徴です。そしてコーダでト長調に転調し、ブラームス自身の歌曲《雨の歌》Op.59-3の旋律が引用されます。

J.S. バッハ：シャコンヌ

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685～1750)の〈シャコンヌ〉は、今回のように単独で演奏されることも多いのですが、もともとは無伴奏ヴァイオリンのための《バルティータ第2番》という組曲のフィナーレです。この作品には1720年、バッハが中部ドイツの街ケーテンで宮廷楽長として活動していた時期の、美しい筆跡の自筆譜が残っています。

低音主題の上で変奏を繰り返すシャコンヌは、バロック時代に好まれた変奏曲の一種です。4小節の主題に基づいて、豊かな楽想の64の変奏が続いてゆきます。その多彩さは、バッハがヴァイオリンという旋律楽器1本だけでどれだけのことが表現できるのか、その限界に挑戦しているかのようです。低音に主題を置くという形式は、無伴奏ヴァイオリンの曲にはふさわしくないようにも思われますが、そこはバッハの腕の見せ所。重音奏法を駆使し、巧みな声部書法で展開されます。そのためヴァイオリニストは、主旋律を奏でる独奏者であると共に、ときに伴奏者にもなり、あるいはフーガの上声部と中間声部と下声部をすべて一人で弾くこともあります。つまり、演奏者には並外れた技術が要求される曲なのです。

リスト：ラ・カンパネラ

ハンガリー出身のフランツ・リスト(1811～1886)は、作曲家、ピアニスト、指揮者、教育者として幅広く活躍した音楽家です。とくに若い頃は、超絶技巧を誇るピアニストとして、ヨーロッパ中を演奏旅行で訪れては拍手喝采を浴びていました。

《ラ・カンパネラ》は、リストの卓越したテクニックが垣間見える作品です。彼がこれほどまでに超絶技巧を極めることになったのは、19歳のとき「悪魔に魂を売ったヴァイオリニスト」と呼ばれたニコロ・パガニーニの演奏を聴いて、大きな衝撃を受けたからでした。そして1834年に、パガニーニのヴァイオリン作品をもとに《パガニーニの「ラ・カンパネラ」による華麗なる大幻想曲》というピアノ曲を作曲。それを1840年に改訂し、他の曲とともに《パガニーニによる超絶技巧練習曲集》にまとめ、さらに1851年にも改訂して《パガニーニ大練習曲集》として発表したものが、現在よく演奏されるバージョンです。「カンパネラ」とは鐘という意味で、実際パガニーニのオリジナルである《ヴァイオリン協奏曲第2番》では鐘が鳴らされます。リストも、ピアノの高音で鐘の響きを再現しようとしています。全体を通して、高速な同音連打やトリル、オクターヴの跳躍など、高度な技巧が次々に披露される曲です。

ラヴェル：ツィガース

「ツィガース」は、フランス語でジプシー(ロマ)を意味します。スペイン国境に近いフランス南西部の港町に生まれ、パリを中心に活躍したモーリス・ラヴェル(1875～1937)は、なぜ異国の題材で作曲したのでしょうか。そのきっかけはブラームスと似ていて、ハンガリー出身のヴァイオリニスト、ジェリー・ダラニーとの出会いでした。あるときダラニーが弾くジプシー音楽を聴いたラヴェルは、彼女の煽情的な演奏とも相まって、その魅力にとりつかれたといえます。そしてそのインスピレーションをもとに1924年にこの小品を作曲し、ダラニーに献呈しました。

曲はヴァイオリン独奏による長い序奏で始まります。ジプシー音楽の特徴である増音程や頻繁なテンポの変化が印象的に用いられています。また、ラヴェルは作曲にあたって、ヴァイオリン奏法への知識を深めるべく、パガニーニの作品を研究したそうです。その成果が、ヴァイオリンの急速なパッセージでの倍音奏法やピッツィカートといった華やかな超絶技巧なのでしょう。